原子核三者若手夏の学校に対する援助要請

文責: 東 武大* (京大理・素粒子論・D1)

2001 年 11 月 30 日

1 夏の学校の開催目的・意義

「原子核三者若手夏の学校」(以下、夏の学校) は、日本国内の各大学及び研究機関に所属する素粒子論・原子核理論・高エネルギー実験の研究に携わる若手研究者が、互いの交流を深めることで将来の研究の可能性を広げるべく、企画運営をしているものです。

この行事は、以下のような意義を持つものであり、2002 年度夏の学校で第 48 回目を迎え、連綿として続いてきました。

- 現在の素粒子論・原子核理論・高エネルギー実験の研究の基本的な流れを掴み、分野全体の基礎的な知識を吸収する。
- 学生同士や講師との議論を通じて、今後の研究活動に必要な共同研究の基盤を形成する。
- 研究会などを通じて、学生が研究発表を行なうことによって、プレゼンテーション能力を向上させる。また、質疑応答によって研究に対する理解を深める。

2 2001 年度夏の学校活動報告

我々原子核三者若手は、2001 年度夏の学校を以下のような内容で開催致しました。

1. 開催日程: 2001 年 8 月 1 日 (水) ~ 8 月 7 日 (火)
   開催地: パノラマランド木島平 (長野県下高井郡木島平村上木島 3878-2)
2. 参加人数: 298 人

	M1	M2	D1	D2	D3	その他	合計
素粒子	89 人	38 人	24 人	11 人	2 人	1 人	165 人
原子核	61 人	15 人	13 人	7 人	4 人	2 人	102 人
高エネルギー	21 人	8 人	1 人	0 人	0 人	1 人	31 人
合計	171 人	61 人	38 人	18 人	6 人	4 人	298 人

3. 講義: 各テーマについて、各パートごとに分れて 6 時間の講義を行ないました (講師名の敬称略)。
   - 素粒子パート:
     「変貌するひもの統一理論」　糸山 浩　(大阪大学)
     「非可換幾何学と場の理論」　綿村 哲　(東北大学)
     「基本法則の場の理論」　井沢 健一　(東京大学)

*mail address: azuma@gauge.scphys.kyoto-u.ac.jp

- 原子核パート:
  「ハイパー核とバリオン間相互作用」　田村 裕和　(東北大学)
  「高励起原子核の構造 - 集団性と統計性」　松尾 正之　(新潟大学)
  「クォーク物質は中性子星の描像をいかに変更するか？」　巽 敏隆　(京都大学)
- 高エネルギーパート:
  「B decay による CP 非保存入門」　宮林 謙吉　(奈良女子大学)
  「JLC 計画の現状と展望」　藤井 恵介　(KEK)
- 三者共通講義:
  「超対称性粒子の探索」　川越 清以　(神戸大学)

4. 研究会: 研究会では、主に学生による研究発表およびその質疑応答を行ないました。また、その他にも以下のような企画を行ないました。

   - 素粒子パート:
     * 講義の質疑応答コーナー
     * パネルディスカッション (素粒子物理学を志す先輩から後輩に向けて)
   - 原子核パート:
     * ポスターセッションによる学生の研究発表
     * Topics 講義: 「軽い不安定原子核の奇妙な構造」 延与 佳子 (KEK)
     * Review Talk: 「原子核の形と周期軌道理論」 杉田 歩 (阪大 RCNP)
       「相対論的高エネルギー原子核衝突実験と高温高密度核物質の性質」
       大塚 直彦 (北海道大学)

5. DC abstract 集: 学生の研究についてまとめた DC abstract 集を作成することにより、夏の学校における学生同士の話題を提供し、また夏の学校に限らず、各大学のセミナーのスピーカーを呼ぶ上での資料として活用されています。

6. 講義録の作成: 各パートで行なわれた講義録を web 上で公開しております。これらの講義録は第一線の研究者による教科書として大学院生によって活用されています。

7. セクハラ対策 WG: 2000 年度夏の学校では、女性参加者に対する悪質なセクハラ事件が 3 件起こりました。三者若手はこの事態を重く見て、「セクハラ対策 WG」を設立することでこのような不祥事を防ぐための対策を行ないました。具体的には 2001 年度には、相談窓口の開設、女性参加者に対する注意メモの配布、参加申し込み HP およびパンフレットへの昨年の出来事と注意の呼び掛けの文書の掲載、女性フロアの分離及び「男子立ち入り禁止」の立て札の設置、茶話会の開催 (三者共通講義後) を行ないました。

   その結果としてあげることのできた成果は以下のとおりであり、とった対策は非常に有効でした。

   - 注意メモについては、アンケートで殆んどの回答者が、不祥事の予防に効果があったと答えていました。
   - 相談窓口の存在自体によって、昨年と比べて夏の学校の雰囲気が引き締まり、改善されました。

   こうした体制は、来年度へもしっかりと引き継いでいきたいと考えております。

3　2001 年度決算

2001 年度の原子核三者若手夏の学校の決算は以下のとおりです[1] 。

[1] 2001 年 9 月 17 日現在

- 収入:

前年度繰越金	2,782,408 円
基研援助 (旅費)	484,640 円
基研援助 (印刷費)	46,200 円
素粒子論グループ援助	450,000 円
参加費	873,000 円
合計	4,636,248 円

- 支出:

講師旅費	81,480 円
ポスター代	46,200 円
学生旅費補助	1,403,780 円
夏の学校運営費	378,883 円
次年度繰越金	2,725,905 円
合計	4,636,248 円

- 今年度の、「講師旅費」は低額でしたが、これは例年と比較して非常に多くの講師の方々が好意で、ご自身の科研費で費用を捻出して頂いたことに依るものです。
- 2000 年度会計までは、繰越金が増大する傾向にありましたが、2001 年度の運営ではこうした問題点の反省を踏まえて、旅費補助を夏の学校の事後に、参加者のキャンセルや運営のための費用が判明した後で算定を行ないました。その結果として、これまでのように黒字が累積する現状を解決しました。

4 将来の運営計画

4.1 夏の学校の改善計画

今後に向けて、夏の学校をより有意義な企画にするために、以下の事柄を検討致しております。

1. 夏の学校の雰囲気の改善:
   2002 年度以降の夏の学校でも、セクハラ対策 WG の行なった、相談窓口の継続、注意メモの配布などを行なって行くことで、夏の学校の雰囲気を引き締めていきたいと考えています。
2. 研究会の活性化:
   これまで行なった企画で好評であるものを継続、あるいは斬新な企画を検討することで、より有意義なものにしていきたいと考えております。

4.2 2002 年度の援助要請の方針

[sg-l 1201] で報告したように、原子核三者若手は現在 280 万円の前年度繰越金が存在しています。こうした現状を踏まえて、我々三者若手は以下の方針で今後の運営にあたりたいと考えております。

1. 若手内部での繰越金の適正金額の共通見解:
   三者若手が今後安定した運営を行なっていくためには、**100** 万円 ~ **150** 万円の範囲内を適正金額と定めました。

2. 素粒子論グループ (以下、素 G)、基礎物理学研究所 (以下、基研) に対する援助:

   - これまで素 G からは 45 万円、基研からは旅費 50 万円および印刷費 10 万円の援助を継続的に頂いてきましたが、前年度繰越金についてはこれまでの援助申請の決算報告の場所で報告してきませんでした。
   - 我々はこうした過去の経緯は、三者若手の過失であると捉えております。そこで素 G に対しては繰越金が適正規模に戻るまで援助を辞退することと致します。同様の意味で基研についても **2002** 年度は印刷費 **10** 万円のみの減額申請と致します。
   - しかしながら、素 G・基研からの援助は、夏の学校の参加者の負担を軽減する上で非常に重要な位置を占めるものであり、繰越金が適正規模に戻った際には、継続した援助を再開して頂けるように交渉を進める方針でおります。

3. 現状では、原子核三者若手は既に繰越金が累積している問題がありますが、将来的に充実した夏の学校の運営を行なうために、以下の機関に援助申請を行いたいと考えております。

   - KEK に対しては、学生旅費補助 **30** 万円の援助申請を致します。
   - RCNP に対しては、講師旅費補助 **20** 万円の援助申請を致します。

5 KEK に要望する援助

我々三者若手は、KEK より将来的に継続した援助を要望致します。2002 年度夏の学校について要望する、金額及び名目は以下のとおりです。

学生旅費補助 **30** 万円

特に遠方の学生にとっては、夏の学校に参加するにあたって経済的負担がどうしても大きくなる現実があります。以下は、2001 年度夏の学校で行なった旅費補助の実態調査のアンケートの資料に基づくものです。

- 添付資料 p1: 旅費に関していえば、約 3 割の学生がほぼ全額研究室からの補助を受けているものの、それ以外の約 7 割の学生は、研究室から全く補助が出ず、したがって自費で高額の旅費を負担せねばならない状況にあります。
- 添付資料 p2: 旅費の自己負担の金額の全国平均値は (夏の学校からの補助を考えに入れなければ) 約 **11,000** 円です。しかし、研究室の補助が出ない学生の中には、高額の負担を余儀なくされる学生が多く存在します。
- 添付資料 p3: 2001 年度夏の学校における、旅費の自己負担額の全国分布を表しています。
- 添付資料 p4: 夏の学校の予算全般について **6** 割の参加者が、「負担を感じる」と回答を寄せております。

こうした現状にあって、夏の学校の参加に伴う経済的な負担を軽減し、学生が夏の学校に参加しやすくすることは、夏の学校を活性化していくうえで不可欠なことです。

以上の事情により、三者若手は KEK より夏の学校への継続した資金援助を頂くことを希望致します。同時に同様の申請は、**RCNP** に対しても行なっていく方針でおります。援助を頂ける場合、夏の学校に後援あるいは共催して頂いた旨をポスターやパンフレット及び Web に明記させて頂きたいと考えております。三者若手は、KEK よりの資金援助を頂くことで、責任感を持って運営に尽力し若手活動を活性化していくことを約束致します。